

しんこくおうごしよ
神国王御書

「それおもんみれば、日本国をまたは水穂みずほの国、または野馬台やまと、または秋津嶋あきつしま、または扶桑等と云ふ」云云。六十六国・二つの嶋、已上六十八ヶ国。東西三千余里、南北は不定ふじようなり。この国に五畿七道あり。五畿と申すは山城・大和・河内・和泉・摂津等なり。七道と申すは東海道十五箇国・東山道八箇国とうざんどう・北陸道七ヶ国・山陰道八ヶ国・山陽道八ヶ国・南海道六ヶ国・西海道十一ヶ国。「また鎮西ちんせい、または太宰府だざいふと云ふ」云云。已上これらは国なり。国主をたづぬれば、神代十二代は天神七代・地神五代なり。天神七代の第一は国常立尊くにとこたちのみこと、乃至ないし、第七は伊奘諾尊いざなぎのみこと、男なり。伊奘册尊いざなみのみこと、妻なり。地神五代の第一は天照太神あまてらすおおみかみ、伊勢太神宮日の神いせたいじんぐうひこれなり。いざなぎ・いざなみの御女おんむすめなり。乃至ひこなぎ、第五は彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊ひこなぎさたけうがやふきあえずのみこと。この神は第四のひこほの御子みこなり。母は竜りゆうの女むすめなり。已上地神五代。已上十二代は神世かみよなり。人王にんのうは大体百代ひやくだいなるべきか。そ

の第一の王は神武天皇、これはひこなぎさの御子なり。乃至、第十四は仲哀天皇（八幡の御父なり）。第十五は神功皇后（八幡の御母なり）。第十六は応神天皇にして仲哀と神功の御子。今の八幡大菩薩なり。乃至、第二十九代は宣化天皇なり。この時まで月氏・漢土には仏法ありしかども、日本国にはいまだわたらず。

第三十代は欽明天皇。この皇は第二十七代の継体の御嫡子なり。治三十二年。この皇の治十三年（壬申）十月十三日（辛酉、百済国の聖明皇、金銅の釈迦仏を渡し奉る。今日本国の上下万人一同に阿弥陀仏と申すこれなり。「その表文に云く、「臣聞く、万法の中には仏法最も善し。世間の道にも仏法最も上なり。天皇陛下もまた修行あるべし。故に敬て仏像・経教・法師を捧げて使に附して貢献す。宜しく信行あるべき者なり」」（已上）。しかりといへども、欽明・敏達・用明の三代三十余年は崇め給ふ事なし。その間の事さまざまなりといへども、その時の天変地天は今の代にこそにて候へども、今はまたその代にはにるべくもなき変天なり。

第三十三代崇峻^{すしゆん}天皇の御宇^{ぎよう}より仏法^わ我が朝^{ちよう}に崇められて、第三十四代推古^{すいこ}天皇の御宇^{ぎよう}に盛^{さかん}にひろまり給いき。この時、三論^{さんろん}宗^{しゆう}と成実^{じようじつ}宗^{しゆう}と申す宗、始めて渡つて候ひき。この三論宗は、月氏^{げつし}にても漢土^{わんつ}にても日本^{にっぽん}にても、大乘^{だいじよう}の宗^{しゆう}の始めなり。故に宗の母とも、宗の父とも申す。人王^{にんのう}三十六代に皇極^{こうぎよく}天皇の御宇^{ぎよう}に禪宗^{ぜん}わたる。人王^{にんのう}四十四代天武^{てんむ}の御宇^{ぎよう}に法相^{ほつそう}宗^{しゆう}わたる。人王^{にんのう}四十四代元正^{げんしやう}天皇の御宇^{ぎよう}に大日^{だいにか}経^{けい}わたる。人王^{にんのう}四十五代に聖武^{しやうむ}天皇の御宇^{ぎよう}に華嚴^{けごん}宗^{しゆう}を弘通^{くわうつう}せさせ給ふ。人王^{にんのう}四十六代孝謙^{こうけん}天皇の御宇^{ぎよう}に律宗^{りつしゆう}と法華^{ほつけしゆう}宗^{しゆう}わたる。しかりといへども、ただ律宗ばかりを弘めて、天台法華宗は弘通なし。人王^{にんのう}第五十代に最澄^{さいちやう}と申す聖^{しやう}人^{にん}あり。法華宗を我^{われ}と見出して、俱舍^{くしや}宗^{しゆう}・成実^{じようじつ}宗^{しゆう}・律宗^{りつしゆう}・法相^{ほつそう}宗^{しゆう}・三論^{さんろん}宗^{しゆう}・華嚴^{けごん}宗^{しゆう}等の六宗^{りくしゆう}をせめをとし給ふのみならず、漢土^{わんつ}に大日^{だいにか}宗^{しゆう}と申す宗ありとしろしめせり。同じき御宇^{ぎよう}に漢土^{わんつ}にわたりて、四宗^{ししゆう}をならいわたし給ふ。いわゆる法華宗^{ほつけしゆう}・真言宗^{まごん}・禪宗^{ぜん}・大乘^{だいじよう}の律宗^{りつしゆう}なり。しかりといへども、法華宗と律宗とをば弘通ありて、禪宗をば弘め給はず。真言宗をば宗の字をけづり、たゞ七大寺等の諸僧^{しよそう}に灌頂^{かんじやう}

を許し給ふ。しかれども世間の人々は、いかなる故という事をしらず。当時の人々の云く、この人は漢土にて法華宗をば委細いさいにならいて、真言宗をばくはしく知し食しろめし給はざりけるか、とすい（推）し申すなり。

同じき御宇に空海くわいかいと申す人、漢土にわたりて真言宗をならう。しかりといへども、いま

だこの御代みよには帰朝なし。人王第五十一代に平城天皇の御宇に帰朝あり。五十二代嵯峨

の天皇の御宇に、弘仁十四年こうにんへ癸卯みずのとう正月十九日に、真言宗の住処とうじ東寺を給ひて護国

教王院きょうおういんとがうす。伝教でんぎょう大師御入滅の一年の後のちなり。人王五十四代仁明天皇の御宇に、

円えん仁和尚漢土にわたりて、重ねて法華・真言の二宗をならいわたす。人王五十五代文徳もんたく

天皇の御宇に、仁寿にんじゆと斉衡さいこうとに金剛頂こんごうちゆう經きやうの疏じよ・蘇悉地經そしつちの疏じよ、已上十四卷を造りて、

大日經だいにちきやうの義ぎ釈しゃくに並べて真言宗の三部とがうし、比叡山ひえいざんの内に捨持院そうちを建立こんりゆうし、真言宗

を弘通する事この時なり。叡山えいざんに真言宗を許されしかば、座主ざす両方を兼かねたり。しかれど

も法華宗をば月のごとく、真言宗をば日のごとくといひしかば、諸人等は真言宗はすこし

勝すぐれたりとをもちけり。しかれども座主ざすは両方を兼かねて兼学し給ひけり。大衆だいしゆもまたかくのごとし。

同じき御宇に円珍えんちん和尚と申す人御入唐ごにつとう。漢土にして法華・真言の両宗をならう。同じき

御代に天安二年に帰朝す。この人は、本朝ほんちようにしては叡山第一の座主義真ぎしん・第二の座主

円澄えんちよう・别当光定べつとうこうじよう・第三の座主円仁えんにん等に、法華・真言の両宗をならいきわめ給ふのみ

ならず、また東寺の真言をも習ひ給へり。その後に漢土にわたりて法華・真言の両宗をみ

がき給ふ。今の三井寺みいでらの法華・真言の元祖智証がんそちしよう大師これなり。已上四大師なり。掇そうじ

て日本国には真言宗にまた八家けあり。東寺に五家け、弘法大師こうぼうを本もととす。天台に三家け、慈覚じかく

大師もとを本もととす。

人王八十一代をば安徳天皇あんとくと申す。父は高倉院たかくらいんの長子ちようし、母は太政たじよう入道にゆうどうの女むすめ

建礼門院けんれいもんいんなり。この王は元暦元年げんりやく〔乙巳きのとみ〕三月二十四日、八嶋やしまにして海中ちゆうに崩ほうじ給

ひき。この王は源みなもとの頼朝將軍よりともにせめられて、海中ちゆうのいろくづの食じきとなり給ふ。人王八

十二代は隱岐の法皇と申す、高倉の第三王子、文治元年（丙午）御即位。八十三代には阿波の院、隱岐の法皇の長子、建仁二年に位に継ぎ給ふ。八十四代には佐渡の院、隱岐の法皇の第二の王子、承久三年（辛巳）二月二十六日に王位につき給ふ。同じき七月に佐渡のしまへうつされ給ふ。この二・三・四の三王は父子なり。鎌倉の右大将の家人義時にせめられさせ給へるなり。

ここに日蓮大に疑つて云く、仏と申すは三界の国主、大梵王・第六天の魔王・帝釈・日・月・四天・転輪聖王・諸王の師なり、主なり、親なり、三界の諸王は皆この釈迦仏より分ち給ひて、諸国の総領・別領等の主となし給へり。故に梵・釈等は、或は木像、或は画像等にあがめ給ふ。須臾も相背かば、梵王の高台もくづれ、帝釈の喜見もやぶれ、輪王もかほり（冠）落ち給ふべし。神と申すはまた国々の国主等の崩御し給へるを、生身のごとくあがめ給う。これまた国王・国人のための父母なり、主君なり、師匠なり。片時もそむかば国安穩なるべからず。これを崇むれば、国

は三災を消し七難を払ひ、人は病なく長寿を持ち、後生には人天と三乗と仏となり給ふべし。

しかるに我が日本国は一閻浮提の内、月氏・漢土にもすぐれ、八万の国にも超へたる国ぞかし。その故は月氏の仏法は、西域(記)等に載せられて候にはただ七十余ヶ国なり。その余は皆外道の国なり。漢土の寺は十万八千四十所なり。我朝の山寺は十七万一千三十七所。この国は月氏・漢土に対すれば、日本国に伊豆の大嶋を対せるがごとし。寺をかざれば漢土・月氏にも雲泥すぎたり。かれはまた大乘の国・小乗の国、大乘も権大乘の国なり。これは寺ごとに八宗・十宗をならい、家々宅々に大乘を誦誦す。

かの月氏・漢土等は仏法を用ふる人は千人に一人なり。この日本国は外道一人もなし。その上、神はまた第一天照太神・第二八幡大菩薩・第三は山王等の三千余社。昼夜に我が国をまほり、朝夕に国家を見そなわし給ふ。その上、天照太神は内侍所と申す明鏡にかげをうかべ、大裏にあがめられ給ひ、八幡大菩薩は宝殿をすてて、主上の頂

を栖すみかとし給ふと申す。

仏かこの加護と申し、神の守護と申し、いかなれば彼かの安德と隱岐と阿波・佐渡等の王は、相伝そうでんの所しよじゆう従等にせめられて、或は殺され、或は嶋はなに放たれ、或は鬼となり、或は大地獄だいじごくには墮おち給ひしぞ。日本国の叡山えいざん・七寺・東寺・園城等おんじやうとうの十七万一千三十七所の山々寺々に、いさゝかの御仏事おんぶつじを行ふには、皆天長地久てんちやうちきゆう、玉体安穩ぎよくたいあんのんとこそいのり給ひ候へ。その上、八幡大菩薩こつは殊てんのうしゆごに天王守護の大願たいがんあり。人王第四十八代たかのに高野天皇の玉体いに入り給ひて云く、「我が国家開闢こつかかいびやく以来、臣しんをもつて君となすこといまだあらざる事ことなり。天之日嗣あまつひつぎは必ず皇緒こうちよを立つ」等云云。また「太神おおみかみ、行教ぎやうきやうに付して云く、我われに百王守護ひやくおうしゆごの誓ちかひあり」等云云。されば神武天皇より已来百王このかたにいたるまでは、いかなる事ことありとも玉体はつゝがあるべからず。王位おういを傾かたむくる者もあるべからず。一生いつしやうふ補ふ処しよの菩薩ちゆうようは中天しやうにんなし。聖人しやうにんは横死おうしせずと申す。いかにとして彼々かれがれの四王は王位おういををいをとされ、国をうばわるるのみならず、命を海にすて、身を鳴々いに入れ給ひけるやらむ。

天照太神は玉体に入りかわり給はざりけるか。八幡大菩薩の百王の誓ちかいはいかにとなりぬるぞ。

その上、安徳天皇の御宇には、明雲座主御師みようんぎすおんしとなり、太上入道だじょうにゆうどう並に一門怠状を捧げて云く「彼の興福寺をもつて藤氏の氏寺となし、春日の社をもつて藤氏の氏神となせしがごとく、延暦寺をもつて平氏の氏寺と号し、日吉の社をもつて平氏の氏神と号す」云云。叡山には明雲座主を始として三千人の大衆、五壇の大法を行ひ、大臣以下家々に尊勝陀羅尼・不動明王を供養し、諸寺諸山には奉幣し、大法秘法を尽さずという事なし。また承久の合戦の御時は天台座主慈円・仁和寺の御室・三井等の高僧等を相催あいもよおし、日本国にわたれる所の大法秘法残りなく行なわれ給ふ。いわゆる承久三年じようきゆう（辛巳）四月十九日に十五壇の法を行はる。天台座主は一字金輪法等。五月二日は仁和寺の御室、如法愛染明王法を紫宸殿にて行ひ給ふ。また六月八日には御室、守護おむろ経法しゆごを行ひ給ふ。已上四十一人の高僧十五壇の大法、この法を行ふ事は日本に第二度な

り。権ごんの大夫殿たゆうはこの事を知り給ふ事なければ、御調伏ごじようぶくも行ひ給はず。またいかに行ひ給ふとも、かの法々、かの人々にはすぐべからず。仏法の御力おんちからと申し、王法の威力いりよくと申し、彼は国王かれなり、三界の諸王守護し給ふ。此これは日本国の民たみなり、わづかに小鬼しようきぞまほりけん。代々だいだいの所従しよじゆう、重々じゆうじゆうの家人けにんなり。譬へば王威を用ひて民をせめば、鷹きじの雉きをとり、猫ねこのねずみを食くらひ、蛇へびがかへるをのみ、師子王ししおうの兔うさぎを殺すにてこそあるべし。なにしにか、かろがるしく天神地祇てんじんちぎには申すべき。仏・菩薩をばをどろかし奉るべき。師子王が兔をとらむに精進しようじんをすべきか。たかがきじを食くらはんにいのりあるべしや。いかにいのらずとも、大王の身として民を失はんには、大水だिसуйの小火しようかをけし、大風だいふうの小雲しよううんを巻まくにてこそあるべけれ。その上、大火だいかに枯木かれきを加ふるがごとく、大河たいがに大雨だいうを下すがごとく、王法の力に大法を行ひ合せて、頼朝よりともと義時よしときとの本命ほんめいと元神がんじんとをば、梵王ふんおうと帝釈みきと等に拔取ぬきとらせ給ふ。譬へば古酒こしゆに酔へる者のごとし。蛇かえるの蝦かえるの魂たまを奪かふがごとし。頼朝おんたましいと義時おんたとの御魂おんたましい・御名おんな・御姓おんうじをばかきつけて、諸尊しよそん・諸神しよじん等の御足みあしの下にふま

せまいらせていのりしかば、いかにもこらうべしともみへざりしに、いかにとして
いちねんひとつき
 一年一月も延びずして、わずかに二日一日にはほろび給ひけるやらむ。仏法を流布るふの国
よくよくごあん
 の主とならむ人々は、能能御案ありて、後生ごしようをも定め、御いおんのりもあるべきか。
 しかるに日蓮、この事を疑ひしゆへに、幼少こころの比より随分に顕密けんみつ二道並に諸宗の一切の
 経を、或は人にならない、或は我われと開き見し、勘かんがへ見て候へば、故の候ひけるぞ。我が面おもて
 を見る事は明鏡めいきようによるべし。国土こくどの盛衰せいすいを計はかることは仏鏡ぶつきようにはすぐべからず。仁王にんのう
きよう
 経・金光明経・最勝王経さいしようおう・守護経しゆご・涅槃経ねはん・法華経等の諸大乘経を開き見奉り候
 に、仏法に付きて国も盛さかへ、人の寿いのちも長く、また仏法に付きて国もほろび、人の寿も短みじか
 かるべしとみへて候。譬へば水は能く舟をたすけ、水は能く舟をやぶる。五穀ごこくは人をや
 しない、人を損ず。小波小風しょうはしょうふうは大船だいせんを損ずる事かたし。大波大風だいはだいふうには小舟やぶれや
まが
 すし。王法の曲るは小波小風のごとし。大国と大人だいにんをば失ひがたし。仏法の失とがあるは大
 風大波の小舟をやぶるがごとし。国のやぶるゝ事疑ひなし。仏記ぶつきに云く、我滅後わがめつご、末代まつだい

には悪法・悪人の国をほろぼし、仏法を失はんには失すべからず。譬へば三千大千世界の
 草木を薪たきぎとして須弥山しゆみせんをやくに、やけず。劫火ごうかの時、須弥山の根ねより大豆計りの火出
 て須弥山をやくがごとく、我が法わもまたかくのごとし。悪人・外道げどう・天魔てんま・波旬はじゆん・五
 通等つうとうにはやぶられず。仏のごとく、六通の羅漢らかんのごとく、三衣さんねを皮のごとく身に紆まとい、
 一鉢いつぱつを両眼りやうがんにあてたらむ持戒じかいの僧等そうらと、大風の草木をなびかすごとくなる高僧等、我
 が正法しようぼうを失ふべし。その時、梵・釈・日月・四天しつてんいかりをなし、その国に大天変だいてんべん・大
 地天等ちようとうを発おこしていさめむに、いさめられずば、その国の内に七難しちなんををこし、父母・兄弟
 ・王臣わうしん・万民互ばんみんごに大怨敵だいろんてきとなり、梟きやうちやう鳥が母を食くらひ、破鏡はけいが父をがいするがごとく、
 自国じこくをやぶらせて、結句けつこは他国たこくよりその国をせめさすべしとみへて候。
 今日蓮けいま、一代聖教いちだいしやうぎやうの明鏡めいきやうをもつて日本国にっぽんこくを浮うかべ見候に、この鏡かがみに浮んで候人々は、
 国敵こくてき・仏敵ぶつてきたる事疑ひなし。一代聖教の中に、法華経は明鏡の中の神鏡しんきやうなり。銅鏡等どうきやうとう
 は人の形をばうかぶれども、いまだ心をばうかべず。法華経は人の形を浮ぶるのみならず、

心をも浮べ給へり。心を浮ぶるのみならず、先業せんごうをも未来をも鑑かんみ給ふ事くもりなし。法華經の第七の巻を見候へば、「如来の滅後において、仏の所説の經いんねんおよの因縁及び次第を知つて、義に随つて実のごとく説かん。日月の光明にちがつつの能く諸よの幽冥ゆうみやうを除くがごとく、斯この人世間ひとせけんに行じて能く衆生の闇を滅す」等云云。文の心は、この法華經を一字も一句も説く人は、必ず一代聖教の浅深と次第しだいとを能々よくよく弁よくよくへたらむ人の説くべき事に候。譬へば曆の三百六十日をかながうるに、一日も相違せば万日俱に反逆ほんぎやくすべし。三十一字みそひともじを連ねたる一句一字も相違せば、三十一字共に歌にてあるべからず。たとひ一經を讀誦すとも、始め寂滅道場じやくめつどうじょうより終り双林最後そうりんにいたるまで、次第と浅深とに迷惑せば、その人は我が身も五逆ごぎやくを作らずして無間地獄むけんじごくに入り、これを帰依きえせん檀那だんなも阿鼻あびだい大城じやうに墮おつべし。いかにいわんや、智人ちじん一人出現して一代聖教の浅深・勝劣を弁えん時、元祖がんそが迷惑を相伝そうでんせる諸僧等、或は国師となり、或は諸家しよけの師となりなんどせる人々、自みずからのきずが顕あらわるゝ上、人にかろしめられん事をなげきて、上に挙あぐる一人の智人を、或

は国主に訴へ、或は万人にそしらせん。その時、守護の天神等てんじんの国をやぶらん事は、芭蕉の葉を大風たいふうのさき、小舟こぶねを大波おおなみのやぶらむがごとしと見へて候。

無量義経は、始め寂滅道場より終り般若経はんにやにいたるまでの一切経いっさいきようを、或は名を挙げ、

或は年紀ねんきを限りて「未頭真実みけんしんじつ」と定めぬ。涅槃経と申すは、仏最後の御物語おんものがたりに、初め

初成道しよじようどうより

五十年の説教の御物語、四十余年をば無量義経のごとく邪見じやけんの経と定め、

法華経をば我が主君わしゆくんと号し給ふ。中に法華経ましまして、已今当いこんとうの勅宣ちよくせんを下し給ひし

かば、多宝・十方の諸仏かはん加判かはんありて、各々本土おのおのにかへり給ひしを、月氏の付法蔵ふほうぞうの二十

四人は、ただ小乗・権大乘を弘通くわうつうして、法華経の実義のを宣べ給ふ事なし。譬へば日本国

の行基菩薩ぎようきと鑑真和尚かんじんわじようとの、法華経の義を知り給ひて弘通なかりしがごとし。漢土の

南北の十師は、内にも仏法の勝劣を弁へず、外にも浅深めいわくに迷惑せり。また三論宗さんろんしゆの吉蔵

・華嚴宗けごんの澄観ちようかん・法相宗ほつそうの慈恩じおん、これらの人々は、内にも迷ひ外にも知らざりしかど

も、道心堅固どうしんけんこの人々なれば、名聞みやうもんをすて、天台の義に付きにき。知らず、さればこの

人々は懺悔さんげの力に依りて生死やはなれけむ。はたまた謗法ほうぼうの罪は重く、懺悔の力は弱くして、阿闍世王あじゃせおう・無垢論師等のごとく地獄にや墮おちにけん。

善無畏三蔵ぜんむいさんぞう・金剛智三蔵こんごうち・不空三蔵等ふくうの三三蔵さんさんぞうは、一切の真言師の申すは、大日如来

より五代六代の人々、即身成仏そくしんじようぶつの根本こんぽんなり等云云。日蓮勘へて云く、法偷ほうちゆうの元師がんしな

り、盗人ぬすびとの根本こんぽんなり。これらの人々は、月氏だいにちきようよりは大日経こんごうちよう・金剛頂経そしつち・蘇悉地経等

を齋もてきた来る。この経々は華嚴・般若・涅槃経等に及ばざる上、法華経に対すれば七重しちじゆうの

下劣げれつなり。経文に見へて赫々かくかくたり明々めいめいたり。しかるを漢土きたに來りて天台大師の止觀しかん等

の三十卷を見て、舌をふるい心をまどわして、これに及ばずば我が経弘通ぐずうしがたし。勝すぐ

れたりといはんとすれば妄語もうご眼前がんぜんなり。いかんがせんと案ぜし程に、一つの深き大妄語だいもうご

を案あんじ出し給ふ。いわゆる大日経の三十一品を、法華経二十八品並に無量義経に腹あわ

せに合せて、三密さんみつの中の意密いみつをば法華経どうに同じ、その上に印いんと真言しんごんとを加へて、法華

経りやくは略りやくなり、大日経こうは広こうなり。已いにも入れず、今こんにも入れず、当とうにもはづれぬ。法華

經をかたうどとして三説の難を脱のがれ、結句は印と真言とを用もちひて、法華經を打落して真
 言宗を立てゝ候。譬へば三女さんによが后きさきと成りて三王さんろうを喪ほろせしがごとし。法華經の流通るつうの
 涅槃經の第九に、「我れ滅のちして後、悪比丘等我が正法を滅めつすべし。譬へば女人のごとし」
 と記しし給ひけへるはこれなり。されば善無畏三蔵は閻魔王にせめられて、鉄なわの繩すじ七脈しちつ
 けられて、からくして蘇よみがえりたれども、また死する時は黒皮隠々こくひんいんとして骨ほね甚なはだ露あらはる
 と申して、無間地獄むげんの前相をその死骨しこつに頭かしらはし給ひぬ。人死して後ち色の黒きは地獄に
 墮おつとは、一代聖教の定むるところなり。金剛智・不空等もまたこれをもて知んぬべし。
 この人々は改悔かいげはありと見へて候へども、強盛ごうじようの懺悔さんげのなかりけるか。今の真言師は
 またあへて知る事なし。玄宗皇帝げんそうこうていの御代みよの喪ほろし事も不審ふしんはれて候。
 日本国はまた弘法こうぼう・慈覚じかく・智証ちしよう、この謗法を習ひ伝へて自身も知ろしめさず、人はま
 たをいもよらず。しばらくは法華宗の人々相論そうろんありしかども、終ついには天台宗やうやく
 衰へて、叡山五十五代の座主ざす明雲みょううん、人王八十一代の安徳天皇あんとくより已このかた來は、叡山一向に

真言宗となりぬ。第六十一代の座主顕真権僧正は、天台座主の名を得て真言宗に遷るけんしんごんそうじようのみならず、しかる後、法華・真言をすて、一向謗法の法然が弟子となりぬ。承久調伏じようきゆうじようぶくの上衆慈円僧正は、第六十二代並に五・九・七十一代の四代の座主、隠岐の法皇の御師なり。これらの人々は善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏・慈覚・智証等の真言をば、うつわ器はかわれども一の智水なり。その上、天台宗の座主の名を盗みて、法華經の御領をちすい知行して三千の頭となり、一国の法の師と仰がれて、大日經を本として七重くだれるかしら真言を用ひて、八重勝れりとをもへるは、天を地とをもち、民を王とあやまち、石を珠はちじゆうすくとあやまつのみならず、珠を石という人なり。教主釈尊・多宝仏・十方の諸仏の御怨敵ごおんできたるのみならず、一切衆生の眼目を奪ひ取り、三善道の門を閉ぢ、三悪道の道を開いつさいしめじようく。梵・釈・日月・四天等の諸天善神、いかでかこの人を罰せさせ給はざらむ。いかでかこの人を仰ぐ檀那をば守護し給ふべき。天照太神の内侍所も、八幡大菩薩の百王守護の御おんちかいも、いかでか叶はせ給ふべき。かな

余よ、この由をかつ知りしより已このかた来いちぶん、一分の慈悲に催されて、ほほ随分の弟子にあら／＼
 申せし程に、次第に増長して国主まで聞きこえぬ。国主は理りを親おやとし非ひを敵てきとすべき人にて
 をはすべきが、いかんがしたりけん、諸しよにん人の讒ざんげん言げんををさめて、一人の余よをすて給ふ。彼か
 の天台大師は南北の諸人あだみしかども、陳ちん・隋ずい二代の帝みかど重おもんじ給ひしかば、諸人の怨あだ
 もうすかりき。此この伝教大師は南都七大寺讒言せしかども、桓武かんむ・平城へいぜい・嵯峨さかの三皇用
 ひ給ひしかば、怨敵おんてきもをかしがたし。今日いま蓮は日本国十七万一千三十七所の諸僧等のあ
 だするのみならず、国主用ひ給はざれば、万民あだをなす事、父母の敵かたきにも超こへ、宿世すくせ
 のかたきにもすぐれたり。結句は二度の遠流おんる、一度の頭こつべに及ぶ。彼の大莊嚴だいしようごんぶつの末法まつぽう
 の四比丘しびく、並に六百八十万億那由佗なゆたの諸人が、普事比丘ふじびくいちにん一人をあだみしにも超こへ、師子しし
 音王おんのうぶつの末すえの勝意比丘しよういびくの無量の弟子等が、喜根比丘きこんびくをせめしにも勝れり。覺徳比丘かくとくびく
 がせめられし、不輕菩薩ふきやうぼさつが杖木じやうもくをかをほりしも、限りあればこれにはよもすぎじとぞ
 をばへ候。もし百千にも一つ日蓮法華經の行者にて候ならば、日本国の諸人、後生ごしやうの無む

間地獄けんじごくはしばらくをく、現身げんしんには国を失ひ他国に取られん事、彼の徽宗きそう・欽宗きんそうのごとく、優陀延王うだえんおう・訖利多王きりたおうのごとくならむ。またその外ほかは、或はその身みやは白癩びやくらい・黒癩こくらい、或は諸悪しよあく重病じゆうびよう疑ひなかるべきか。もしその義なくば、また日蓮法華經の行者にあらじ。この身みや現身には白癩びやくらい・黒癩こくらい等の諸悪重病を受け取り、後生には提婆たいば・瞿伽利等くぎやりとのごとく無間大城むけんだいじように墮つべし。日月を射いたてまつ奉しゆらる修羅はその矢還つて我が眼まなこに立ち、師子王を吼ほゆる狗犬いぬは我が腹をやぶる。釈子しやくしを殺せし波琉璃王は水中の中の大火に入り、仏の御身おんみより血を出せし提婆達多は現身に阿鼻あびの炎ほのおを感じり。金銅こんどうの釈尊をやきし守屋もりやは四天してんの王の矢にあたり、東大寺とうだいじ・興福寺を焼きし清盛きよもり入道にゆうどうは現身にその身もう(燃)る病やまいをうけにき。彼等かれらは皆大事だいじなれども日蓮が事に合あはすれば小事しょうじなり。小事しょうじすらなおしるしあり。大事だいじいかでか現罰げんばつなからむ。

よろこ 悦よろこばしいかな。経文まかに任せて五五百ごごひやくさいこう歳せん宣ふ流布まをまつ。悲しいかな、鬪とう諍じよう堅固けんこの時ときに當あたつてこの国しゆら修羅道じゆらどうとなるべし。清盛きよもり入道にゆうどうと頼朝よりともとは源平げんへいの両家りやうか、本もとより狗犬いぬと

猿さる猴さるとのごとし。小人しょうじん小福しょうふくの頼朝頼朝をあだみしゆへに、宿敵しゆくてきたる入道入道の一門一門はほろび
 し上とが、科しゆじようなき主上さいかいの西海さいかいに沈み給ひし事は不便ふびんの事なり。これは教主じつぼう釈尊釈尊・多宝じつぼう・十方じつぼう
 の仏おんつかいの御使おんつかいとして、世間いちぶんには一分とがの失とがなき者を、一国ちやうてきの諸人ちやうてきにあだますのみならず、
 兩度あの流罪にちちゆうに当て、日中こうじに鎌倉こうじの小路こうじをわたす事ちやうてき朝敵ちやうてきのごとし。その外しょうあん、小庵しょうあんに
 は釈尊あんちを本尊あんちとし一切あんち経あんちを安置あんちしたりし、その室はを刎はねこぼちて、仏像は・経卷はを諸人はに
 ふまするのみならず、糞泥ふんでいにふみ入れ、日蓮かいちゆうが懐かいちゆう中に法華かいちゆう経かいちゆうを入れまいらせて候かいちゆうひし
 を、とりいだして頭こうべをさんどに打ちさいなむ。この事しゆくいいかなる宿意しゆくいもなし。当座とうざの科とが
 もなし。ただ法華ぐずう経ぐずうを弘通ばかする計ばかりの大科ばかなり。
 日蓮じよほん天じよほんに向ひ声をあげて申じよほんさく、法華じよほん経じよほんの序品じよほんを拜見じよほんし奉じよほんれば、梵ぼん・釈しゃくと日月しゃくと、四
 天りゆうおうと竜あしゆら王あしゆらと、阿修羅にかいはちばんと二界しゆ八番しゆの衆しゆと、無量しよじんの国土しよじんの諸神しゆうえと集會しゆうえし給しゆうえひたりし時、
 已いこんとう今いこんとう当いこんとうに第一われの説われを聞きし時、我せつせんどうじとも雪山せつせんどうじ童子せつせんどうじのごとく身を供養やくおうし、薬王やくおう菩薩やくおうのごと
 く臂ひじをもやかんとをもちしに、教主みまえ釈尊みまえ、多宝じつぼう・十方じつぼうの諸仏みまえの御前みまえにして、「今いま仏前いまに

おいて自みずから誓せいごん言ごんを説せけこと諫かんぎよう曉きやうし給たまひしかば、幸さいわいに順じゆん風ふうを得えて、「世せ尊そんの勅ちよくのごとくまさに具ぐふさなに奉ぶぎよう行ぎやうすべし」と二に処しよさんえ三さん会えの衆しゆ一同どうに大だい音おん声じようを放はなちて誓せいひ給たまひしはいかんがあるべき。ただ仏ぶつぜん前ぜんにてはかくのごとく申まをして、多た宝ぼう・十じつ方ぽうの諸しよ仏ぶつは本土ほんどにかへり給たまふ。积じく尊そんは御ご入に滅めつならせ給たまひてほど久くしくなりぬれば、末まつ代だい辺へん国こくに法ほふ華か経きやうの行者ぎやうありとも、梵ぼん・积じく・日にち月げつ等とう、御おん誓ちかひをうちわすれて守まも護ごし給たまふ事ことなくば、日にち蓮れんがためには一旦いつたんのなげきなり。無む始し已い来らい、鷹たかの前のきじ、蛇へびの前のかへる、猫ねこの前のねずみ、犬いぬの前のさるとありし時ときもありき。ゆめの代よなれば、仏ぶつ・菩ぼ薩ざつ・諸しよ天てんにすかされまいらせたりける者ものにてこそ候まをわめ。なによりもなげかしき事は、梵ぼんと帝たいと日にち月げつと四し天てん等とうの、南なん無む妙めう法ほふ蓮れん華か経きやうの法ほふ華か経きやうの行者ぎやうの大だい難なんに値あふをすてさせ給たまひて、現げん身しんに天てんの果か報ほうも尽じんきて、花はなの大だい風ふうに散ちるがごとく、雨あめの空そらより下くだるごとく、「其人ごにん命みやう終じゆう、入に阿あ鼻び獄ごく」と無む間ま大だい城じやうに墮おち給たまはん事ことこそ、あわれにはをぼへ候まをへ。たとひ彼かの人ひと々々、三さん世せ十じつ方ぽうの諸しよ仏ぶつをかたうどとして知らぬよしのべ申し給たまふとも、日にち蓮れんはその人ひと々々には強こわきかたきなり。

もし仏のへんぱをはせずば、梵・釈・日月・四天をば、無間大城には必ずつけたてまつるべし。日蓮が眼と口とをそろしくば、いそぎ／＼仏前の誓ひをばはたし給へ。

日蓮が口（以後欠落）

またむぎ（麦）ひとひつ（一櫃）・鷺目両貫・わかめ・かちめ・みる一俵給び了んぬ。干
い（飯）・やきごめ各々一かうぶくる給び畢んぬ。一々の御志はかきつくすべしと申
せども、法門巨多に候へば留め候ひ了んぬ。他門にきかせ給ふなよ。大事の事どもか
きて候なり。